

データサイエンス学部新設に向けて

すでに新聞等でも報じられておりますように、滋賀大学の「データサイエンス学部」新設構想は大きな注目を集めています。本稿執筆時点(1月末)で、3月中旬に文部科学省に提出する膨大な認可申請書類の準備作業も大詰めをむかえており、多忙な毎日が続いています。ここでは、データサイエンス学部新設構想の経緯や育成する人材像について説明します。なお、私自身は昨年5月より滋賀大学にクロスアポイントメントの形で着任し、新学部の人事などに携わってきました。また本年4月より滋賀大学専任となり、入学試験の準備など新学部の立ち上げに専念いたします。



データサイエンス教育ワークショップで新学部カリキュラム構想を語る 姫野哲人推進室准教授

滋賀大学では、以前より第3学部構想が検討されていました。しかしながら、滋賀大学として特色の出せる具体的な構想がなかなか打ち出せない状況にありました。1年半ほど前に、日本学術会議より「ビッグデータ時代に対応する人材の育成」という提言が出され、ビッグデータ時代におけるデータサイエンティストの育成が我が国にとって喫緊の課題であることが指摘されました。佐和隆光前学長が、この提言の重要性に着目し、データサイエンス学部新設構想を掲げて学内の意見を集約し、文部科学省との交渉に精力的



同ワークショップでの質疑応答

データサイエンス教育研究推進室室長 竹村 彰通

に取り組みました。データサイエンティスト育成の重要性は文部科学省においても強く認識されており、滋賀大学の新学部構想の先進性への評価も高く、構想は急速に現実味を帯びて行きました。私も1年ほど前に、佐和前学長よりデータサイエンス教育研究推進室長就任への打診をいただきましたが、前学長の先見性・リーダーシップに感銘を受けました。また、大学全体として教員及び学生定員増が見込まれない状況の中で、滋賀大学全体の発展の観点から新学部設立に協力されている滋賀大学のスタッフの姿勢に、感心しました。

滋賀大学の構想に関する文部科学省の高い評価は、滋賀大学より申請した「人文社会系大学から文理融合型大学への転換 — データサイエンス教育研究拠点形成のための大学間連携の推進 —」が、新学部設置に先立ち、平成27年度「国立大学改革強化推進補助金」交付対象に選ばれたことにも示されています。



同ワークショップ2日目の光景

その選定理由としては以下のように、構想の先進性が高く評価されています。『『大胆なガバナンス改革と学内資源の再配分等による日本初の「データサイエンス学部(仮称)」を設置。データサイエンスを含む自然科学分野の多様な領域の英知を大学間連携により結集し、先行事例のない最先端の教育プログラム・教材・教授法の開発や教育の質保証システムを確立。人文社会系大学から文理融合型大学への転換に向けた先行モデルを提起。』—この補助金により、現在新学部設置に向けた施設の改修も進められています。

新学部で育成する人材像は、文理融合型の人材です。データサイエンスの技術的な基礎は、データアナリティクス(統計学)およびデータエンジニアリング(情報工学)です。これらは言わば体系的な技術ですが、ビッグデータ時代において最も価値のあるデータは人々の行動(購買、移動、健康等)に関するデータであり、広い意



同ワークショップで挨拶する佐和前学長

味での社会的なデータです。この意味で、データサイエンスの応用領域は文系的なものと言うことができます。我々が考えるデータサイエンティストの人材像は、理系的な基礎の上に、社会的なデータを分析しその中から新たな価値を生み出すまでの能力を備えた人材です。このような人材を卒業させることによって、データサイエンティスト育成に対する社会の要請に真にこたえることができます。新学部のカリキュラムでは、1年生より4年生まで、実際のデータを分析するプロジェクト型の演習を積み重ねることにより、データから有用な情報を取り出す成功体験を積み、価値創造能力の育成をはかることとしています。新学部のカリキュラムについては、広く外部の関係者からもアドバイスをいただいております。昨年12月4日、5日の両日にはデータサイエンス教育のあり方に関するシンポジウムを行いました。5枚の写真はその時の光景です。

インターネットや計測機器の発展は今後も続き、分析すべきデータは増え続けると予想され、データサイエンス学部の未来は明るいと考えています。皆さまのご支援をよろしく願いたします。



同ワークショップで新学部の未来を語る筆者

〈おうみ学術出版会〉誕生 — 新方式の本作りで —

滋賀大学の「夢」、出版会創設がようやく実現! じつは、その思いが公表された6年前は、逆風が吹いていました。平成16年の国立大学法人化前後に生まれた多くの小規模な大学出版会が経営難に陥っていたのです。その跡追いとならぬよう、永遠のブランド「おうみ」にあやかり、メード・イン・オウミの学術を、地域の他の大学や出版社と協働して世に問い続けようと、連携出版方式、を工夫しました。そして昨年暮れ、本学・滋賀県立大学・サンライズ出版の3者が学術出版事業推進協定を締結、おうみ学術出版会が発足したのです。



滋賀大学本部での協定書調印式、2015.12.25

学術出版とは何か — それは、「次世代の学術発展を支える出版」です。具体的には、少なくとも次の条件を充たしていることです。1)分野を越えて読まれる文体で書かれ、2)立論の根拠が明示され、3)索引を備えていること。

出版会組織は、経営面にかかわる運営会議と、本作りを進める編集会議で構成されます。とくに編集会議の成否は、協定3者からの担当者たちの「熱い協働」にかかっています。専門家だけが喜ぶ、昔の学術出版とは異なります。若い才能の開花も支援します。

なお、準備過程では、京都大学学術出版会を始め、多くの大学出版会のご協力を得ました。また、東京の編集者たちのお知恵も借りました。

ロゴには、渡来文化の地らしく漢字を使おうと考え、「淡海」(アブミ、オウミ)の頭字を選びました。約3千年前の青銅器の銘文の中でも、古体をとどめる「水」と「炎」の2字を集字したものです。



制作は泉屋博古館館長 小南一郎氏

創刊冊は、本年3月に出しました。書名は『江戸時代近江の商いと暮らし — 湖国の歴史資料を読む』。本学経済学部附属史料館の共同研究成果の報告です。

これから先、おうみ学術出版会が意識する、ゆかりの文人はさまざまでしょう。でも、小野妹子どの、紫式部さま、藤樹先生、芭蕉翁、直弼公などは片時も忘れたいお名前ではないでしょうか!

〔横山俊夫〕